

北海道におけるトドマツ、エゾマツの利用と流通の特質

荻 大 陸

Characteristics of Utilization and Distribution of
Sagalien Fir (*Abies sachalinensis* Mast) and
Yezo-Spruce (*Picea jezoensis* Carr) in Hokkaido

Tamutsu OGI

要 旨

- (1) 北海道のトドマツ、エゾマツはわが国最高峰の優良資源であるが、それが極めて低い価値の発現にとどまっている。
- (2) その要因は、①丸太の販売段階から製材品の販売段階に至るまで樹種混極にする、というあたかも薪炭材やパルプ材の如き扱われ方をしていること、②消費者ニーズに適合した造材寸法になっていないこと、③高級役物が採れる丸太であるのに、並材として加工されてしまっていること、④製材品を商品として生産するという意識が甚だ低く、極めて粗雑な製材品を造っていること、等である。
- (3) このように木材資源が低価値利用に陥っている状況は、市場形成が未成熟で閉鎖的な小市場に分断されている国産材の丸太市場一般に広く認められることであり、わが国木材市場における大きな問題である。

は じ め に

わが国において、国産材と外材が際立って異なることの一つは、外材丸太は日本全国を市場として流通し加工されているのに対し、国産材丸太のほうは一般的には地方的な小市場ごとに分散して流通し加工され、全国的な市場を形成していないということであろう。

すなわち米材であれソ連材であれ南洋材であれ、外材丸太は北は北海道から南は九州・沖縄に至るまで、日本全国の製材工場で加工されているとあってよいのに対し、一方国産材丸太のほうは、日本三大美林の一つである（しかし決して有名ではない）「青森ヒバ」は青森で、全国一のスギ産地である秋田のスギは秋田で、日田林業の名で知られた大分県日田のスギは日田で、という風に地域の材は地域で加工されるのが大半である。

たとえば、同じトドマツ、エゾマツでもソ連材のばあいには全国津々浦々の工場で加工されているのに、国有林全体の年間総収穫量の2割を占め、品質的にはソ連材に優るといってよい北海道のトドマツ、エゾマツ材は丸太の流通といえるようなものはなく、しかも北海道内でしか加工されていない（注1）。

筆者はこのような国産材丸太の市場形成の未成熟性がどのような問題をもたらしているかを、秋田、青森、日田等において調査分析してきたところであるが¹⁾同様の問題意識をもって今回北海道のトドマツ、エゾマツ材を調査する機会をもった。

調査機会をつくって頂いた林野庁業務第一課並びに調査に御協力頂いた北海道各営林（支）局、

北海道林務部、北海道林産試験場、北海道木材業界の関係各位に対し、ここに厚くお礼申し上げます。また、実際の調査にあたり御指導頂いた愛媛大学農学部村尾行一教授と、本論作成にあたり御指導頂いた京都大学農学部有木純善教授に心からなる謝意を表する。

1. トドマツ、エゾマツの資源的価値

北海道のトドマツ、エゾマツの蓄積は昭和61年度には1億6,500万 m^3 、でそのほぼ8割近くは国有林によって占められている。

昭和62年度の北海道における木材の総供給量は1,350万 m^3 で、道内材トドマツ、エゾマツの供給量は313万 m^3 (23%)である。また、そのトドマツ、エゾマツ材のうち国有林材が206万 m^3 (66%)を占めている。

表-1 北海道におけるトドマツ、エゾマツ製材品の出荷動向 単位：万 m^3

製材品 出荷量	道内向け					移出向
	小計	建築用	家具建具用	梱包仕組板	その他	
169	154	139	2	8	5	15
100%	91%					9%

資料：北海道林務部監修『北海道の林産業（昭和63年版）』より

注：数値は昭和62年度実績である。

表-1でみられるように製材用のトドマツ、エゾマツ丸太はすべて道内で加工されているといってよく、製材品もその91%が道内で消費されており、道外に出荷される量は少ない。

このトドマツ、エゾマツは少なくとも100年生から200年生以上という高樹齢の天然木が主体で（注2）、通直で欠点の少ない材である。たとえば同じ高樹齢天然木のなかでも「木曾檜」や「青森ヒバ」は、一般的にその形状が悪く、腐れ、傷もみられる欠点の少ない材であるが、これらの材に比較したならもちろんのこと「秋田杉」に比較してもトドマツ、エゾマツは非常に素性の良い材だといえる。

表-2 わが国における高樹齢針葉樹資源の伐採量 単位：千 m^3

樹種	昭和63年	平成元年	平成2年	営林(支)局
トドマツ	1,163	1,101	1,081	北海道
エゾマツ	915	934	816	北海道
青森ヒバ	255	219	207	青森
木曾檜	89	78	80	長野・名古屋
秋田杉	52	42	38	秋田
魚梁瀬杉	15	12	13	高知

資料：林野庁業務第一課より

注1：事業支障木等で当該年度に販売しない伐採量と立木竹及び幼齢木の補償料に該当する伐採量は含まない。

注2：これは国有林の分のみの数量であり、トドマツ、エゾマツの場合このほか道有林等のものであるので、総量としては300万 m^3 以上という膨大な量になる。

表-2はわが国における主要な高樹齢針葉樹資源の近年の伐採量をみたものである。「魚梁瀬杉」「秋田杉」「木曾檜」はすでに余命いくばくもないといってよく、本州以南では最大の供給量を誇る「青森ヒバ」でさえ平成2年度で約20万 m^3 でしかない（表にはないが平成3年度には10万 m^3 台になった）ことを考えれば、それぞれ100万 m^3 以上、80万 m^3 以上の供給量をもつトドマツ、エゾマツは今日のわが国においては突出した最高品位資源（質・量を兼備した資源）だといえよう。

しかし、これほどの質・量を兼ね備えた高品位資源であるトドマツ、エゾマツの、その値段は驚くべき安さである。図-1をみてみよう。天然「木曾檜」の立方米当り29万円、天然「秋田杉」の25万円に比べ、トドマツ、エゾマツは文字どおり1桁低い値段であり、天然「青森ヒバ」と比

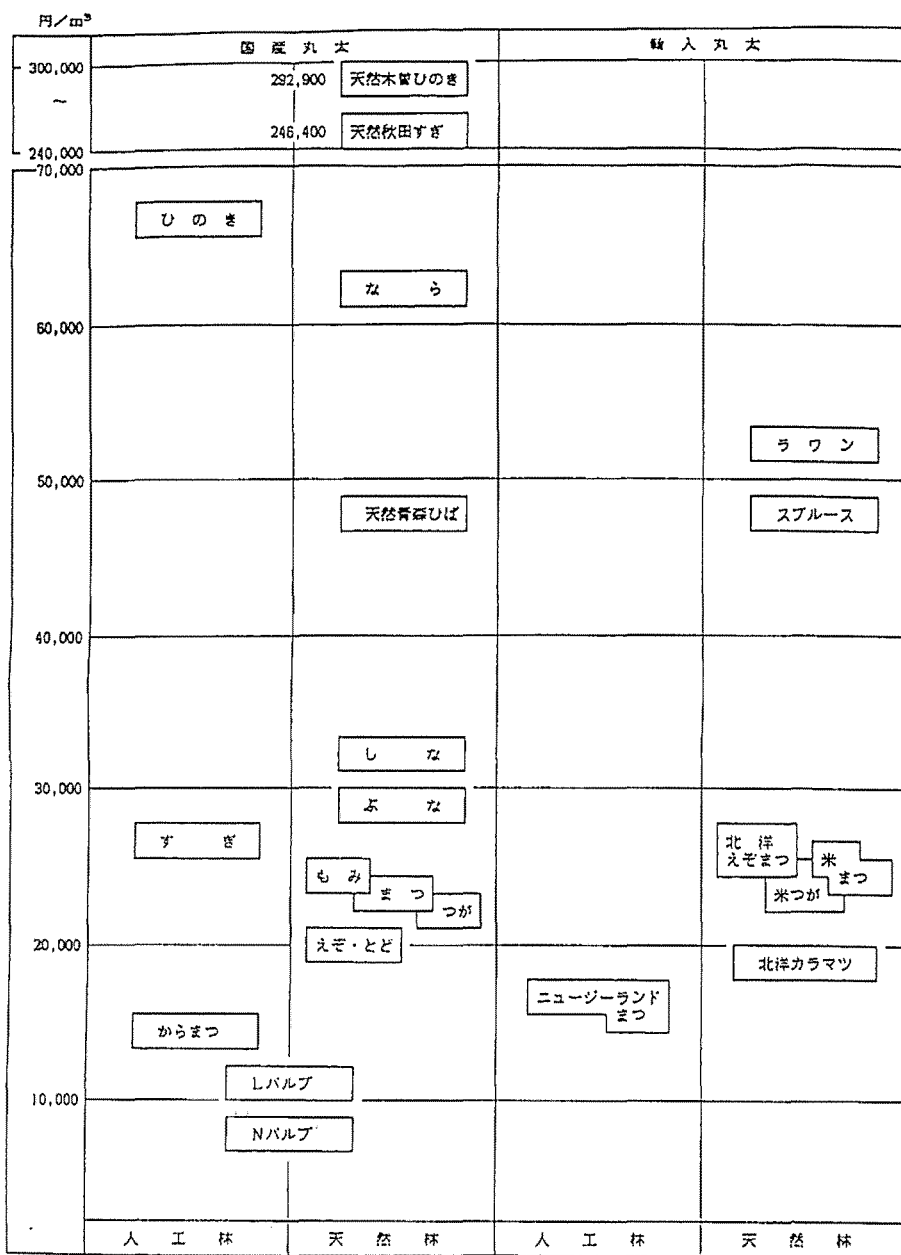


図-1 主要な国産・輸入丸太の価格比較

資料：林野庁業務第一課より

注：木材価格は、農林水産省統計情報部「木材価格」（平成元年5月の価格）である。

但し、天然秋田すぎ、天然木曽ひのき、天然青森ひばは、林野庁調べ。

較してもその半値以下なのである。さらには人工林ヒノキ丸太はもちろんのこと人工林スギ丸太の値段をも大きく下回っている。

2. トドマツ、エゾマツの低価値利用の要因

2-1. 樹種混合の加工と樹種混植の販売

表-3でみるように、北海道国有林におけるトドマツ、エゾマツ材は今日樹種混植で販売されるのが当たり前になっている。しかも国有林、北海道庁の公的統計類のほとんどは常に両者を一括して扱っているという徹底ぶりである。

表-3 トドマツ、エゾマツ丸太の販売における混植率(%) 平成元年度

	道局全体	直轄	旭川	北見	帯広
トド、エゾ混植	94.2	97.6	87.4	95.7	97.2
トド、エゾ別植	5.8	2.4	12.6	4.3	2.8

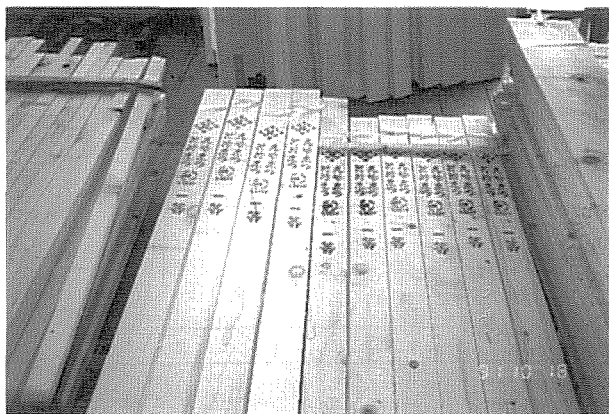
資料：北海道営林局企画課より

注：函館局管内のトドマツ・エゾマツは極めてわずかな量のため載せなかった。但し、道局全体の数値は函館局分も含むものである。

り込みさえ「えぞまつ・とどまつ」或いは「えぞ・とど」と打たれるのが、ごく一般的である(写真-1)。

さらに、トドマツ、エゾマツを製材する工場のほとんどは、多かれ少なかれ外材のスプルスも製材しているが、製材メーカーはこのスプルスをも一緒に混植にして扱っている。つまりトドマツ、エゾマツ、スプルスがなんら区別なく、「えぞまつ・とどまつ」「えぞ・とど」として加工・販売されているのである。

写真-1 「えぞまつ・とどまつ」の摺り込み



1991年10月18日 北海道士別市にて

では嫌がります。トドマツは目が粗いからです。30~40%位までが許容範囲ですね。」

といい、また、別の製材メーカーは、「とくに造作材はエゾマツでないと嫌われます。トドマツは割れの問題を起こしやすいからです。」という。

これは製材段階でもまったく同様である。製材工場の原木置き場にはトドマツ、エゾマツの丸太が込みになって積まれており、それらはそのまま製材機にかけられ、製材品はトドマツ、エゾマツ混植のまま販売される。摺

トドマツ、エゾマツのような天然木の高品質材が樹種も区別されずに加工・販売されているというのは、外材も含めてきわめて稀であろう。

百歩ゆずって、北海道の消費市場はトドマツ、エゾマツを区別なく取り扱うという特異なものであるとすれば、この販売の仕方でも消極的に首肯できよう。しかし実際はまったく違うのである。トドマツとエゾマツは消費段階では明らかに異なった使い方をされている。

しかも製材業者はそのことをまったく知らないわけではない。たとえば、ある製材メーカーは、「造作材にトドマツが多く含まれるのを販売先

実は北海道ではエゾマツは見え掛かり材、トドマツは見え隠れ材、と使い分ける傾向がかなりはっきりあるのである。つまり、一方は役物、他方は並物であり、その価格差は1桁違うのは普通であり、物によっては2桁の差の出ることさえある。したがってトドマツとエゾマツを樹種混極で販売するという事は、役物と並物という格付けの天と地ほどに異なる製材品どうしを一緒に販売しているということになる。

「なぜトドとエゾを混極で販売するのか」

という問いに、製材業者は一様に返答に窮し、

「北海道では今までずっとこうだったから」

というのみである。

ところで、見え掛かり材にトドマツを使用するのを嫌う理由として、よくあげられるのが①「目が粗い」②「割れやすい」ということである。①に関していえば、ここで「目が粗い」といわれるのは専らエゾマツと比較してのことなのである。エゾマツはトドマツより高樹齢木が多く、だから確かにトドマツより目が細かく詰んでいるものが多い。しかしそれはあくまでもエゾマツに比較した場合の相対評価としてはいっても、これをもって100年生以上の高樹齢木であるトドマツの絶対評価とすることはまったくおかしい。

これはあの秋田の「造杉」（人工林スギ）が天然スギとの相対評価だけで地元で「草扱い」（注3）され、60年生以上という高品質材が長い間低価値利用されてきた事情に酷似している。これについては後述する。

②の「割れやすい」という評価であるが、これは乾燥を施さない生材を前提にしているからであり、トドマツが化粧材に向かないということでは全然ない。第一にトドマツのような少なくとも100年生以上の高樹齢材を役物採りしないで、並物用材にするなどというのはどう考えてもおかしい。

「割れ」の問題は乾燥を施せばいいことであり、そもそもトドマツに限らず、およそ建築用材で無乾燥でよい木材など皆無といってよいであろう。したがってこのような理由を挙げるということ自体が、要するに北海道でも製材品の乾燥がいまだ一般化していないことを表しているにすぎない。

乾燥を施せば「割れ」のようなトラブルが起きないことは、たとえば北海道林産試験場（旭川市）の研究者たちも明言している（注4）。

それ以上に問題なのは、「割れやすい」トドマツを見え隠れ部材になら使う、という業界の姿勢であろう。「割れ」など起こしやすい材を見え隠れ部材に使用したりしたら、実際にトラブルが起きてもその発見は容易ではなく、またその補修コストも見え掛かり部材の比ではない。ここには消費者の意向などならんら顧慮しようとはしない木材産業界の後進性が覗かれるのである。

2-2. 高品質材の並材化

トドマツ、エゾマツの製材は高品質材に相応しい商品を生産しているとはいえない。トドマツ、エゾマツのような高樹齢の大径木であれば、フリッチ（集成材や張天井板用化粧単板）、天井板、高級造作材、役物の太角（大黒柱・小黒柱等）、そして磨丸太等の高付加価値商品こそが先ず生産されねばならないだろう。

ところが、それどころかトドマツ、エゾマツの製材にあっては、そもそも役物を主体に採る乃至は役物を専門に採るという発想がない。それはトドマツとエゾマツが区別なく2樹種込みで扱われていることを思い出してみればよい。なぜならそれは製材品が役物（見え掛かり部材）なのか並物（見え隠れ部材）なのか、ほとんど意識されずに製材されていることの樹種取扱いへの反映といってよいからである。

現在のトドマツ、エゾマツ製材業者の意識としては、役物は木採りを行ってつくられるものではなく、ただの結果として出てくるものにすぎない。丸太が大径級の高品質材なるがゆえに特段の木採り技術がなくとも、つくられた製材品のなかには役物も混じってくる。それを並物と役物に分けるだけである。すなわち役物は仕訳の工程（それも必ずしもメーカーが行うとは限らず、売られた先、たとえば小売店などが行う場合も多い）から生まれる商品にすぎないのである。

量産型を志向する工場はある。しかし、役物採りと並物採りという最も付加価値生産を左右する加工工程がまったく未分化の状態であり、したがってトドマツ、エゾマツはすべてが並材化されてしまっている。役物（それも超高級品）用丸太がむぎむぎ並材化させられてしまい、この結果トドマツ、エゾマツはその資源的価値が生かされず低価値商品化を余儀なくされているのである。

現在のトドマツ、エゾマツ製材は秋田の「造杉」製材の近過去とまったくといってよいほど相似である。²⁾

秋田の「造杉」は樹齢が60年生以上（だからなかには70年生、80年生以上のものも含まれる）という優良資源でありながら、秋田の林材業界はそれを草扱いにし、だから「造杉」から役物が採れるとは考えてもみなかった。このため「造杉」は典型的な見え隠れ部材である横主体の羽柄材一辺倒の製材しかされず、そして秋田の業界は不況時になるときまって「儲らない、赤字だ」と言っては秋田営林局に対し、丸太価格の値下げ陳情を繰り返すのをほとんど年中行事のようにしていた。

表-4にみるように、横の値段は立方米当り4万円台からせいぜい6万円台である。過去最高でも6万9,000円である。紆余曲折を経て秋田の業界が「造杉」から本格的な役物（割角）採りを行い出したのは、他のいくつかの地域が秋田から「造杉」丸太を購入して役物採りを開始してからすでに何年も経たず、実に昭和52年1月のことである。

表-4 横と割角（等級別）の価格比較

単位：円/㎡

	横	割角			
		一面無節	二面無節	三面無節	四面無節
52年 1月	50,000	120,000	160,000	200,000	300,000
53年 1月	47,000	115,000	180,000	245,000	275,000
54年 1月	52,000	140,000	250,000	330,000	360,000
55年 1月	67,000	160,000	300,000	420,000	435,000
56年 1月	51,000	120,000	270,000	390,000	410,000
57年 1月	49,000	110,000	260,000	380,000	400,000
58年 1月	50,000	110,000	260,000	360,000	400,000
59年 1月	46,000	90,000	210,000	310,000	350,000
60年 1月	48,000	95,000	200,000	300,000	320,000
61年 1月	46,500	95,000	220,000	290,000	300,000
62年 1月	45,500	98,000	240,000	280,000	320,000
63年 1月	53,000	135,000	280,000	350,000	400,000
最高価格	69,000	180,000	350,000	460,000	500,000
	55年 3月	62年 9月	62年 9月	55年 2月	55年 3月
最低価格	44,500	90,000	160,000	200,000	250,000
	61年 7月	58年 6月	52年 1月	52年 1月	52年 5月

資料：割角は秋田県北木材センターの出来値、横は東京秋田会評定による東京店着価格。

注：横の長さは3.65m、割角の長さは3m。

その割角の出来は
いまだ多分に粗削り
で、いわば太目の横
（日栄福岡市場浜間屋
の評価）といった程
度のものであったに
もかかわらず、表-
4のように横が立方
米当り5万円に対し
割角は一面無節が12
万円、二面無節が16
万円、三面無節が20
万円、四面無節が30
万円となり、割角は
それぞれ横の値段の
2.4倍、3.2倍、4.0倍、
6.0倍もの高い価値を
実現したのである。
まさに劇的な変化と
いえよう（注5）。

要するに北海道のトドマツ、エゾマツの資源の開発は、この秋田「造杉」の役物採り以前の状態と同じ段階にあるとあってよい。いや、秋田の「造杉」はトドマツ、エゾマツに比べればはるかに若齢の人工林にすぎない。それにしても上記の如き大きな変化を示したのであるからには、ましていわんやトドマツ、エゾマツにおいておやと言うべきであろう。

2-3. ニーズ不適合の寸法規格

すでに表-1でみたように、トドマツ、エゾマツの製材品はほとんどが北海道内で消費され、道外の市場の開拓はほとんどすすんでいない。

その理由は極めて簡単である。

北海道の製材工場が生産するトドマツ、エゾマツ製材品の長さ寸法はほぼ9尺(2.73m)と12尺(3.65m)の2種類である。そのため北海道の各営林(支)局では表-5でみるように2.73mと3.65m一辺倒の造材しか行っていない。

表-5 北東所在営林局における主要樹種の造材寸法別販売量の割合(%)平成元年度

造材寸法 (長さ:cm)	北海道全局 トド, エゾ	青森局 造杉	秋田局 造杉	青森局 ヒバ
273	4.2	-	-	-
365	95.8	62.7	76.0	-
400	-	23.7	2.7	73.3
その他	-	13.6	21.3	26.7

資料: 林野庁業務第一課より

ところが本州以南に販売する

には、まず第一に長さ寸法が2種しかないのでは実際の需要に対応するのがとても難しい。第二に2.73mと3.65mという寸法では、絶対に全国を市場とする商品にはなれない。

全国的に通用する長さ寸法は3m, 4m, 6m等である。つまり柱等縦使いのものは3m, 6mが、そして横使いのものは4mが、長さの標準サイズである。3.65m寸法は関東以北の一部の部材(代表的なものは典型的な見え隠れ部材である横・垂木)で使われるが、それらの部材でも近年は4m(そしてその中間型としての3.8m)サイズが浸透しつつある。とくに尠大な需要を抱える首都圏においてその傾向がすすんでいる。

だから、たとえば首都圏に入ってきている北海道のトドマツ、エゾマツ製材品について、新東京木材商業協同組合理事長の村崎正幸氏は、「最近、道材が注目を浴びてきている中、あの3.65尺という長さを3.8尺にできないものか、とこういう希望が大工さんにあるんです。3.65尺ぴったりでしょ。まったく余裕がないんですね。それで3.8尺というのは北海道でできないものだろうかという声が最近出てきてるんです。それだけ道材が使われてきているということですから、ぜひ考えてほしいとおもいます」(平成3年4月27日付『林材新聞』)と明言している。

このように3.65m寸法は、たとえ使用されていても、少なくとも3.8mは欲しいのに無いので仕方なしに一部の部材に使われているのである。

まして2.73m材は、道外ではまったくといっていいほど使ってもらえないであろう。要するに、トドマツ、エゾマツ材は道外のニーズに適合した商品になっていないのである。

それでは現行の2.73m寸法と3.65m寸法が道内の需要には適合しているのかといえば、これもかなり疑問なのである。

表-6は札幌近郊に建てられた木造住宅の「材料調書」(いわゆる木拾い表)の一例で、表-7はそれを長さの系列ごとにまとめたものである。これによれば確かに2.73・3.65m系統材の比率が9割近くに達しており、圧倒的多数が使用されている。しかしこれは、そもそも供給されているトドマツ、エゾマツ材(丸太・製材品とも)には2.73・3.65m系統材しかないといっていいのであるから当然のことである。逆に、それにもかかわらず非2.73・3.65m系統材が1割以上も

表-6 札幌近郊の木造住宅の木拾い表

部材名	寸法 (mm)	個数	備考
柱	①3000×105×105	76 (85.6)	
	②2730×105×105	10 (11.1)	
	③3000×105×75	1 (1.1)	
	④6300×105×105	3 (3.3)	
柱小計		90 (100.0)	
梁	①3650×105×105	100	
	②3650×270×105	8	
	③3650×150×105	6	
	④3650×300×105	2	
	⑤2730×240×105	8	
	⑥2730×270×105	3	
母屋	①3650×90×90	24	
	②2730×90×90	6	
半柱	①3650×105×45	2	
根太・屋根垂木	①3650×105×45	130	
	②2730×105×45	20	
間柱	①3650×105×24	100	
	②3650×75×24	20	
マグサ	①1820×105×30	40	
	②2730×105×30	8	
筋交	①3650×105×45	30	
破風板	①3650×300×30	10	
	②3650×105×18	13	
	③2730×300×30	3	
笠木	①3650×120×30/45	13	
雨転	①3650×60×45	13	
野縁	①3650×45×45	80	
	②3650×45×18	60	
	③2730×45×45	42	
	④2730×45×18	30	
	⑤1820×45×18	20	
外胴縁	①3650×45×15	120	
	②3650×105×15	20	
胴縁	①3650×45×18	100	
	②2730×45×18	100	
	③1820×45×18	80	
内法	①3650×105×45	5	造作材
前縁	①3650×105×45	3	〃
	②2730×105×45	2	〃
台輪	①3650×45×45	3	〃
	②2730×45×45	4	〃
畳寄せ	①3650×60×24	1	〃
	②2730×60×24	2	〃
雑幅摺	①3650×24×15	2	〃
	②2730×24×15	2	〃
長押	①3650×105×18	2	〃
	②2730×105×18	2	〃
巾木	①3800×60×15	27	造作材 (ラワン)
	②2800×60×15	3	〃
内法	①3800×155×30	23	〃
	②3800×105×24	8	〃
	③2800×105×24	7	〃
カーテンBOX	①3800×150×21	2	〃
	②3800×120×21	3	〃
	③2800×120×21	8	〃
	④2800×150×21	4	〃

資料：株式会社鼻和組（北海道恵庭市）より

注：「柱」の項の括弧内は各柱部材の割合（%）

使用されているという事実のほうこそが注目されねばならない。

しかも内容をさらに具体的にみれば、90本使用されている柱のうち、85.6%占める77本が3m材であり、2.73m材は11.1%に当たる10本にすぎない。すなわち表-6でみるように部材のなかでも最も主体をなす柱角の長さが極めてはっきりと3mになっているのである。

2.73mという特殊北海道的な柱角の長さが一般化したのは、第二次大戦後の一時期の低質住宅（バラック長屋等）全盛期に、そうした住宅用に9尺（2.73m）柱が使われ出したことからである。だからいまだに北海道に2.73mの柱があるのはその時代の後遺症と理解すべきなのであり、現実の住宅のほうはいまや3mが主流となってきているのである。

それにもかかわらず供給側のほうは相も変わらず、このいわば一時的緊急避難的寸法のままで製材品を製造し丸太を造材しているのである。

同様のことは造作材についてもいえる。表-8でみるように造作材は2.73・3.65m系統材が24.8%しかないのに対し、75.2%が非2.73・3.65m系統

材によって占められている。すなわち典型的役物であるがゆえに価格的には大きな比重を占める造作材もはっきりと非2.73・3.65m系統材とくに3.8m材が主流になっている。

表-6ではこのほか6.3m材も使われている。すなわち北海道でも通し柱は使われているのである。それにもかかわらず、それに対応したトドマツ、エゾマツの製材品がつくられていない。だからその穴を埋めるものとして外材が入ってくるのである。

また3.8mの造作材全部にラワン材が使用されているが、もしトドマツやエゾマツにも3.8mサイズがあれば、このようなことは容易に起こらなかったであろう。なぜならば図-1で分かるようにラワン材の値段はトドマツ、エゾマツ材の2.5倍以上もするからである。

2.73mと3.65mの寸法を押し通すことの不条理さは、なによりもトドマツ、エゾマツ製材工場のほとんどが多かれ少なかれ外材のスプルーを入れてに端的に現れている。すなわちトドマツ、エゾマツでは対応できない寸法、とくに3.65m超の需要に対応しているのがスプルーなのである。

このように北海道において外材が入り込む主たる理由の一つは、トドマツ、エゾマツ材の寸法がニーズに適合していないからである。

2-4. 低い商品生産意識

写真-2は製品市に出荷された製材品である。製材品の両端を切り揃える、いわゆる「端切り」をするメーカーはほとんどいない。そのため製材品の両端は山で伐り倒された時のままの伐り口をさらしているの、汚く醜い。両端がデコボコで不揃いというだけでなく、なかにはどこからどこまでが本当の長さなのか分からない、というものさえある。

そもそも北海道の製材業には「仕上げ」という観念が無きに等しい。端切りをしないのもそうだし、挽き肌が極端に悪く、その材面の荒さ（「粗さ」ではない）は持つと手が傷

表-7 材長(cm)別個数割合

材長	個数	割合
273	242	17.1
365	867	61.3
182	140	9.9
小計	1,249	88.3
※300	77	5.4
※630	3	0.2
※380	63	4.5
※280	22	1.6
※小計	165	11.7
計	1,414	100.0

資料：表-6より作成

注：※は非273・365系統材を表す

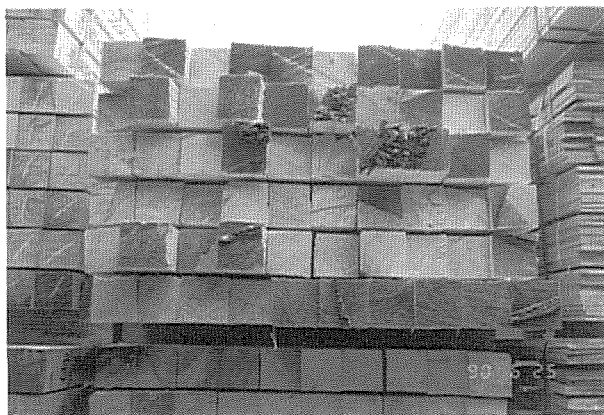
表-8 造作材の材長(cm)別個数割合

材長	個数	割合
273	12	10.6
365	16	14.2
小計	28	24.8
※380	63	55.8
※280	22	19.5
※小計	85	75.2
計	113	100.0

資料：表-6より作成

注：※は非273・365系統材を表す

写真-2 「端切り」されない製材品



1990年6月25日 北海道木材市場協同組合（札幌市）にて

写真-3 野積みで販売している製品市

1990年6月25日 北海道木材市場協同組合
(札幌市)にて

つくのではないかとと思われるほど粗雑なものが多い。

「摺り込み」に至ってはまったくの「面汚し」ではないか、といたくなるような拙劣さである。製材品流通業者も同様である。写真-3にみられるように、製品市の製材品の林場が戸外であり、製材品が野積みそのまま販売されている。役物でさえ野ざらしのまま積み重ねられているのである。これは一般の小売店でも同じで、そこではしばしば舗装もしていない土場がそのまま製材品置き場になっている。

本州以南では製品市の林場であれ、小売店であれ、製材品置き場は屋内もしくは屋根付きが常識である。丸太でさえ舗装された林場に極列されるのが当たり前になっている。製材品をまして役物まで野積みしたり土場に置くなどということは到底考えられない。

商品生産としての粗雑さ・未熟さという点においても、トドマツ、エゾマツ業界は突出している。

3. トドマツ、エゾマツ問題の一般性

北海道という小宇宙的市場のなかで、トドマツ、エゾマツ材がいかに低価値利用に陥っているかを明らかにし

てきた。

このトドマツ、エゾマツ材のおかれた状況が、とくに例外的なものといえないことは、すでに本論のなかでもひいた秋田「造杉」の例を挙げるまでもない。いや、第一にトドマツ、エゾマツ同様の高樹齢天然木資源であるあの「青森ヒバ」の現状も大局的には大差ないのである。図-1で「木曾檜」「秋田杉」と比較した「青森ヒバ」の値段をみてほしい。こういった状況は閉鎖的・地方的な小市場の形成にとどまっている国産材丸太市場一般に共通するものであり、わが国木材市場における大きな問題といえよう。

注1：国産材丸太流通の閉鎖性を打ち破って広域市場化がすすんでいるのは、現在のところ岡山県美作（津山・真庭）メーカーを求心力とする中国・北近畿市場圏と、東濃檜メーカー、松阪地区メーカー、桜井・吉野メーカーが求心力となって成立している東海・近畿市場圏であるが、これについての論考は別の機会にゆずりたい。

注2：エゾマツの寿命は200～250年くらい（場合によっては350年くらいに達するものもある）で、トドマツはそれより短く150年くらいとされているが、実際に材として出てきているものはおおよそトドマツが120年生くらい、そしてエゾマツはそれを上回るものが多い（北海道営林局企画課）。

注3：秋田の業界は、「天杉」（天然林スギ）は木だが、「造杉」などは「木とはいえない、草も同然」といって「造杉」を厄介物扱いしていた。だから「天杉」に対する明かな差別用語として、人工林スギをゾウスギ（造杉）という蔑称で呼んだのである。

注4：北海道林産試験場の青柳正英企画指導部長、米田昌世経営科長、河原洋三主任研究員らによれば、人工乾燥を適正に施せば割れなどの問題はない、という。

注5：とはいえ「造杉」の価値がこれで満度にひき出されるようになったかといえば、決して

そうではなく、やっと端緒が開けたという程度にすぎない。たとえば、東濃檜メーカーの桑原木材によって実証され公表されたにもかかわらず、役物の柱適材を含有する22cm下材は一括して小丸太として扱われ、それは例の典型的下地材である羽柄材一辺倒に加工されてしまっている。

引用文献

- 1) 荻大陸 (1990) 木材消費地市場と産地連関 (1) - 国産材 - (森田学編著『日本林業の市場問題 - 日本林業の「危機」と産地化・組織化 - 日本林業調査会』所収) 300-313
- 2) 村尾行一主査 (1989) 首都圏における国有林材の流通と消費の実態調査報告書. 林野庁・(社) 全日本木材市場連盟. 29-69

Résumé

Although sagalien fir and yezo-spruce are valuable timber resources in Japan, they are hardly appreciated as high as they should be.

There are four significant factors to be recognized related to this unfortunate fact. 1) The two species are always stacked mixed together during the sales of sawlogs and lumber. 2) The length of these sawlogs are not compatible with the needs of consumers. 3) High grade sawlogs are quite often processed as common grade sawlogs. 4) The sawmill operators are not aware of improving their operation to produce higher quality commodity.

The above is generally caused by the domestic log market which is sub-divided into the relatively small and exclusive local markets, that is recognized as a crucial issue for the domestic timber market.